



〈コ ン テ ン ツ〉

- 所長年頭所感
- 自然彩々(センターの四季/生き物たちを紹介)
- 究める/広める/育てる(業務最前線)
- 知識の泉(森の話/木の話)
- 職員面々(新たに配属された職員を紹介)
- 楽/学広場(主催行事/研修情報)
- キーボード(編集後記)

M E T S A - M I Y A G I

「メッサ・みやぎ」も「組織」もリニューアル！

宮城県林業技術総合センター 農林水産部技術参事兼所長 鈴木 登

「メッサ・みやぎ」は平成8年10月に産声を上げました。その創刊号において、当時の木村敏男場長は「試験場の今取り組んでいること、伝えたいこと等をわかり易くまとめた情報誌を通し、林業試験場に対する理解を少しでも深めていただければ幸いです。」との期待を述べていました。

その後、平成20年3月に本県の森林・林業施策の基本となる将来ビジョンが策定されたのを契機に、同年4月には新たに「宮城県林業試験研究推進構想」を策定し、その実現をめざすべく、林業試験場を林業技術総合センターとして組織再編いたしました。

センターには普及指導チームを新たに配置し、研究部門には新たに地域支援部を設置するなどして、現場ニーズの把握とニーズの試験研究への反映を迅速かつ機動的に対応できる体制に整え、森林の健全な利用と保全、地域産業振興への技術支援、さらには人材育成の取組を強化できるようにしました。

改めて、本県の森林・林業が抱える課題の技術的解決を担う県内唯一の機関であることを再認識し、所員が想いを一つにして皆様に頼られるセンターにしていかなければなりません。県政の課題解決のために設置された我々「公設試」(公立試験研究機関)は、人的、資金的、施設的にも様々な制約を抱えていますが、かつて(独)森林総合研究所次長でおられた金谷紀行氏が、「(研究員は)、プロフェッショナルとしての研究を進めつつも自分の殻に閉じこもることなく、フットワーク(現場調査)をよくし、人的ネットワークや研究領域の幅を一層広めていくという気構えを持って任務を果たしていくことが責務」であると述べていました。私は、今でも氏のこの言葉が忘れられません。現場に積極的に出かけることによりニーズと課題を敏感に感じ取り、研究成果の現地化を早め、そして行政との両輪による産業振興支援が容易であるなどの「公設試」のメリットを活かすことが何よりも大切です。

成果を着実に上げて、学会等での発表を積極的に行うとともに、HPの充実、公開講座の開催、所内開放、そして、広報誌として生まれ変わった「メッサ・みやぎ」の発行などを通して、創刊時の志を忘れることなく、県民の方々が理解できるようわかりやすい情報の発信に努めてまいりますので、関係各位のなお一層の御理解とご支援をお願い申し上げます。



自然彩々

★三波川冬桜

センター内には様々な木々が植えられています。花を目にすることがめっきり少ない冬の日。思わぬサクラの花が咲いています。日本さくらの会設立20周年記念で昭和61年3月に植えられた20種の一つで、群馬県の鬼石町を流れる三波川近くの桜山公園に植えられている冬桜で、国の名勝・天然記念物になっているそうです。寒々とした風景の中では、さすがのサクラも可憐とはほど遠く、なにか凜とした逞しさを感じます。(地域支援部 田畑)



★自動撮影装置の妙技(野生動物へのアプローチ)

野生動物の調査には、①捕獲(許可が必要) ②目撃情報の収集③フィールドサイン(足跡・糞・食痕など)探査の主に3つの方法があります。これらに加え、最近注目されているのが自動撮影装置です。撮影画像から野生動物の種類を特定し、生息やその行動を確認することができるほか、似たような足跡が残るニホンジカとカモシカを見分けることができるといった利点があります。

次回から、センター内の森林や道路沿いに設置して撮影することができた、とっておきの野生動物たちを紹介します。(企画管理部 佐々木)



究める/広める/育てる

センター業務の柱である試験研究や普及指導、人材育成(研修)業務の最前線をご紹介します。

★スギ人工林の有効活用で副収入源をめざす!

県内では9月上旬にスギ林や竹林で発生するオオイチョウタケの、スギ人工林の林床での人工栽培に取り組んでいます。このきのこは、柔らかな歯応えと濃厚な出汁で人気があります。これまでに、菌糸を培地に蔓延させた菌床を春季に埋設した場合、翌年秋季に子実体発生が始まることや、子実体の発生時期や形態が菌株によって異なることが分かりました。今後は、低コストで早期に子実体が発生する栽培手法等を検討してまいります。

(地域支援部 更級)



傘径20cmを超す大きな子実体

★兎追いし彼の山、里山(林)をもっと身近に!

5回シリーズで、5月から11月にかけて里山林管理基礎講座を開講しています。既に森林づくりボランティアに参加している方や、これから活動をめざそうとしている方などが受講対象です。内容は、「里山林管理の意義」「人工林及び雑木林の手入れの方法」「道具の使い方とメンテナンス」についての実習と机上講義です。今や、里山林は生物多様性の観点から非常に注目されています。その一方で人々の暮らしから遠のいてしまった里山林を、今一度身近に感じてみませんか。(普及指導チーム 粕谷)



樹木調査を行う受講生

知識の泉(森の話/木の話)

森林や木材に関するとおきの知識をわかりやすくご紹介します。

★冬なのに落葉しない落葉樹なんて・・・

あり得ないと思いきや、ジンチョウゲ科の落葉樹で1m程度にしかならない小低木のナニワズは、春ではなく初秋に開葉し、冬になっても常緑樹のように葉を広げて、落葉して明るくなった林床で陽光を我が物のように浴びながら越冬します。翌年の初夏に落葉し、初秋になると再び開葉します。このようにナニワズの落葉期は冬でなく夏なので、別名ナツボウズ(夏坊主)とも呼ばれています。因みに、春に付ける黄色い花はとても良い香りがします。

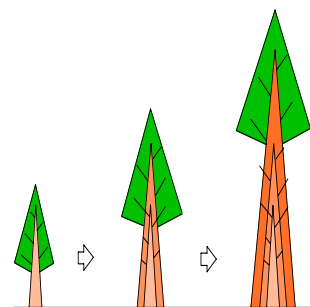
(環境資源部 田中)



ナニワズの葉

★樹木の成長を紐解けば・・・

その源は、樹皮の直下にある細胞分裂をしている非常に薄い形成層です。そこで、木部を形成しながら外側へ移動していきます。それは、パイ生地を重ねていくイメージです。直径1mの大木でも、内部には直径10cmにも満たない幼木を含んでいるということです。樹木内部では、でんぷんなどの貯蔵物質の化学的変化はありますが、組織の構造は変化しません。幼木のときの繊維は短くてしなりやすい性質があります。その成長に必要な栄養分は、葉が太陽光で光合成により作りだします。(地域支援部 大西)



樹木の成長過程

職員面々

平成21年4月1日付けでセンターに初めて配属となった職員や再び配属となった職員の皆さんをご紹介します。

(企画管理部 坂田照典)

10年ぶりに帰ってきました。センター内の見るモノ全てが懐かしく感じられる一方で、毎日片道65キロの通勤に苦戦しています。10年一昔と言いますが、林業試験場が林業技術総合センターに改編され、試験研究の実施には評価制度が導入されて、内部外部から厳しくチェックされるなど、研究体制の変革を強く実感しています。前回の勤務では、林木育種を担当しそれなりの実績を残したと自画自賛？していますが、今回は、試験研究の調整役として配属となりました。老体とはなりませんが、情報のアンテナを高くして、己を鼓舞させながら頑張りたいと思いますので、よろしくお願ひします。



(地域支援部 今埜実希)

県職員に採用され、「きのこ」という未知の世界に飛び込んでから、早一年が経とうとしています。きのこの生理・生態・栽培環境の調査、空調栽培や野外栽培、菌株の管理等々。仕事に慣れる間もなく、次から次へと押し寄せる新しい展開に、ついて行くのが精一杯の日々を送っていますが、現場の方々や諸先輩に温かくご指導頂いているのが唯一の救いです。早く仕事を覚え、現場の声に耳を傾け、研究テーマを見出せるようになりたいです。そして、研究成果を現場に還元できるよう日々精進して参りたいと思います。まだまだ未熟者ですが、どうぞよろしくお願ひ致します。



(環境資源部 齋藤雄一)

センターに勤務するのは初めてです。赴任の日に、胸を弾ませて出勤したことを今でも思い出します。これで、県職員になってから林務関係の全ての職場を勤務経験したことになります。早くもセンター勤務が1シーズンを経過しますが、期待していたとおり、センターには自然がいっぱい！四季折々の生き物たち(樹木・草花・野鳥・熊など)は素晴らしく、自然を思いっきり満喫しています。申すまでもなく職場の雰囲気は大変良いです。今楽しんでることは、朝のジョギングと野菜づくり(小松菜・白菜・大根・枝豆など)です。みなさんも是非一度はセンターに立ち寄ってみてはいかがでしょうか。お待ちしております。



(地域支援部 玉川和子)

林務職員歴は長いですが、今回初めてセンターに配属となりました。亡き祖父は戦前に岩手県北で製材業を営んでおりました。今回、「木材」にどっぷりと関わることになったのも何かの縁を感じます。木材という「古くて新しい」分野は、これから様々な方面に広がる可能性を秘めています。そのような中、地域の森林資源を様々な形で利用できるよう、精一杯努力していきたいと思ひますので、よろしくお願ひ致します。もうすぐ春です。山野も一気に装いが替わります。私が樹木のなかで一番好きなカラマツが、すごく柔らかな緑色の芽吹きを見せてくれます。ちよっと遠出した際には、是非この木を探して見てください。



(地域支援部 田畑正紀)

22年ぶりの返り咲きです。場内の木々の成長ぶりにあらためてびっくり。シンボルのコノテガシワの並木は恐ろしいほど巨体となり、休憩舎の前のユリノキはさらに威風堂々。一方、内に目を向ければ、評価制度が導入されて、当時のゆったりやんわり感が削ぎ落とされスリムで引き締まった感があります。センターの使命を再認識しながら業務に邁進している今日この頃です。



今、熱中しているのは釣りと料理。魚信に集中し仕事を忘れつつも山と対峙する海の上では、時に明日の林業へのアイデアなり夢が過ぎるのも摩訶不思議。大魚への挑戦とレシピの充実を飽きなく続けたいと思います。

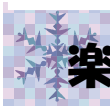
自然彩々(付録)

(センターのシンボル)

展望台にどっしりと座るかのよう、老松2本が聳えています。強風で大枝が幾度となくへし折られながらも、風雪に何十年いや百年以上?も堪え忍び、眼下のまちを見守ってくれている姿に、仕事の疲れや人生の悩みも払拭してくれるようです。

とりわけ、この時期は冠雪が老松の重厚感を引き立てています。

(地域支援部 田畑)



楽/学広場

センター主催の各種イベントや研修会の開催状況、今後の開催予定などをご紹介します。

★地域林業の牽引役を育成中

平成20年度から林業事業体職員を対象に、トータル・コーディネーター育成研修とハイパー林業技能者育成研修を実施しています。前者は、事業地の集約化等により事業量を確保させ販売戦略を立案できる経営感覚を備えた事業担当者をめざし、現在33名が受講、後者は、効率的で採算性の高い作業システムを実現できる高度な技術者をめざし、5名が研修を修了しています。日吉町森林組合湯浅氏や(株)富士通総研梶山氏(現国家戦略室メンバー)ら錚々たる講師陣を配して、提案型集約化施業や間伐コスト分析・作業道開設等、実践面を重視した内容が組み込まれ、受講生の活躍が期待されます。(普及指導チーム 細川)



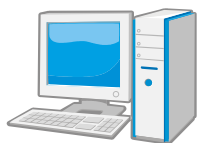
作業路開設現地研修の様相

★成果が人を結び人を育てる

日頃取組んできた試験研究や普及活動の成果を、林業関係者のみならず広く一般県民に聴いてもらうための成果発表会が、去る12月4日に大衡村の平林会館で開催されました。当日は、約100名の参加があり、普及活動成果部門では各地方事務所の普及指導職員代表者から7課題、試験研究部門ではセンター研究職員から5課題の発表がありました。前者については、職員の士気の高揚を図るため優秀発表の審査制度を設けており、今年度は、気仙沼の離島で地元住民とともに長年行ってきた、松くい虫被害跡地の松林再生活動に関する成果報告が最優秀に選ばれました。(普及指導チーム 佐藤)



成果発表会場の様相



キーボード(編集後記)

センターの刊行物を見直す話が出て、2ヶ月余り。経費節約の折りもあって無駄なモノ無駄なコトは一扫する気運が高まる中、一際目立ったのがメッサ・みやぎの光沢ある紙質で体裁の良さ。創刊以来13年の歳月が流れ、当時の志も薄れ、内容的にも形骸化してきました。HPが普及している中、紙ベースでなくともアクセスさえすればいつでも見られるご時世。そのような社会情勢も見据え、思い切ってリニューアルしてみました。弊紙に対する考えも三者三様ですが、まずもって変革(チェンジ)!新鮮な風を絶えず吹き起こして、試行錯誤を繰り返しながら、より読み応えのある広報誌として進化させていきたいと思っています。(MT)

メッサ(METSA)とは・・・

森をこよなく愛するフィンランド人の言葉で「森、木」を意味します。

宮城県林業技術総合センター

〒981-3602

黒川郡大衡村大衡字はぬ木14

TEL022-345-2816 FAX022-345-5377

<http://www.pref.miyagi.jp/stsc/>